

【研究ノート】

松村武雄「アイヌ童話集」とその原典

阪口 諒

要 旨：本稿は、松村武雄「アイヌ童話集」（1924年）の刊行状況と、収録されたアイヌ民話の出典を明らかにしたものである。『世界童話大系』（1924～28年）というシリーズの一冊である『日本篇』の一部として刊行されて以来、「アイヌ童話集」は様々な出版社から繰り返し出版された。近年、松村の神話研究に関する見直しや『日本篇』（特にそのうち「朝鮮童話集」）に関する研究が進んでいる。しかし、「アイヌ童話集」に関しては、児童文学研究、民俗学などの分野においても軽く触れる程度で、ほとんど研究はなされていない。アイヌ民話の資料としては、『日本昔話通観』で引用されているが、「松元童話」としてであるうえ、この童話集が再話であるということに関しては全く触れられていない。そこで本稿では、「アイヌ童話集」の本格的な研究を行う予備段階として、その複雑な刊行過程を明らかにしたうえで、「アイヌ童話集」解説に見られる松村の民族性の恣意的な読み取りを検討する。最後に、改作を調査するうえでも重要であると考え、「アイヌ童話集」の原典を一覧で提示した。

キーワード：松村武雄、『世界童話大系』、『日本童話集』、「アイヌ童話集」、再話

はじめに

本稿は、神話学者の松村武雄がまとめた「アイヌ童話集」の刊行状況と、そこに掲載されたアイヌ民話¹の原典を明らかにしたものである。「アイヌ童話集」がいかなる資料を基に再話したのかを具体的に指摘し、その後で松村が民話からどのように民族性を読み取ったのかを「アイヌ童話集」の解説を事例に検討する。巻末に「アイヌ童話集」の原典を一覧で提示した。

「アイヌ童話集」は、神話学者の松村武雄を中心に編集された『世界童話大系』の第16巻『日本篇』（松村1924、以下『日本篇』）に収録されたもので、1924（大正13）年に日本で刊行された。当時一流の学者たちが翻訳に加わった『世界童話大系』は、少なくとも5回出版され、一般の読者へ大きな影響を与えたと推測される。しかし、これまで「アイヌ童話集」を取り上げた研究はほとんどない²。アイヌ民話の資料として、『日本昔話通観（アイヌ民族）』（稲田・小澤編1989、以下では『通観』）には「アイヌ童話集」のほぼ全てが引用されているが、考証のなされないまま一次資料であるかのように掲載されており、編著者も正しく表記されていない³。

編著者の松村武雄に関しては、これまで主に2つの方向から研究がなされている。1つ目は、大林（1971）、植島（1975）のように、神話研究史を捉える中で松村の学術的貢献を見るものである。近年では、松村らの神話学とナショナリズムとの関係を指摘する平藤（2010）も出ている。

もう1つは韓国の児童文学史研究、民俗学の側から童話集を取り上げたものである。「アイヌ童話集」とともに『日本篇』に収録された「朝鮮童話集」がその主な対象であり、大竹（2001）が1920年代の日本語朝鮮童話集を整理してから進展したものである。日本による植民地支配という状況の中でどのような改作がなされたかに注目した研究（パク2015）や、その他の日本植民地時代の朝鮮童話集との関係を探る研究（金・李2015）、『日本篇』に収録された「日本童話集」、「朝鮮童話集」、「アイヌ童話集」を比較分析する研究（イ2018）

などがある。イ (2018: 448-451) は「アイヌ童話集」に収録の民話のいくつかを取り上げているが、当時の認識を反映して収録された童話の大部分が原始文化の神と共に生きたアイヌの伝統的な生活ぶりを表したものだ (イ 2018: 450) と述べるに留まっており、より詳細な研究が望まれる。本稿は、「アイヌ童話集」の本格的な研究を行う予備段階として、その複雑な刊行過程と解説の問題点、そして収録話の原典を明らかにする。

1. 編著者、松村武雄について

松村武雄 (まつむら・たけお、1883～1969) は、昭和期を代表する神話学者であり、『日本民族学の回顧と展望』において、昭和前期の比較神話学者を評する部分で「最も広い視野に立ち、組織的・体系的なものは、松村武雄である」と述べられている (松前 1966: 185)。戦後においても、「精密な文献的検討と共に、民俗・民族学の諸成果を広く参照し、日本神話の特色を抽出した」と評されている (松前 1966: 188)。松村の学説史における位置付けは、日本神話学への貢献を扱った大林 (1971)、植島 (1975) や、日本の神話研究の流れの中で言及する松前 (1966: 185, 188)、佐々木 (1977: 43-44)、大林 (1972: 163) に詳しい。こうした学説史において、1930年代の研究にはほとんど言及されていないが、平藤 (2010: 314-321) は、1930年代の松村の著作に見られる、神話から牽強付会的に民族性を読みとる姿勢や、皇室信仰、天皇崇拝を称揚する態度を明らかにしている。

松村は童話に関する研究も行っているが、それには、1920～21 (大正 9～10) 年にかけて、森林太郎 (鷗外)、鈴木三重吉、馬淵冷佑とともに⁴、日本の民話を集成した名作集『標準お伽文庫』全 6 巻⁵を刊行した経験が関わると思われる。森鷗外らとの仕事は松村の童話研究および童話集の作成に強い影響を与えたと推測される⁶。

1924 (大正 13) 年以降、本稿で取り上げる「アイヌ童話集」を含む『世界童話大系』全 23 巻のほかにも、『神話伝説大系』全 18 巻のシリーズに編集者として関わっている。1910年代に柳田国男と高木敏雄が編集した『郷土研究』にも松村は寄稿し、初期民俗学の影響を受けている (金・李 2015: 174)。『郷土研究』に掲載された論考からアイヌ民話を再話していることから、そのことが伺える。なお、『世界童話大系』に含まれるのが神話、伝説、笑話などであることから分かるように、松村が「童話」とするものは「伝承説話の域から出なかった」 (向川 1993: 161) が、松村は「説話」という語を『世界童話大系』の「解説」において用いていることからして、「童話」はやはり児童向けであることを意識した語ではないかと思われる。『標準お伽文庫』に関して述べる中でも「児童読物としての説話」 (松村 1943: 179) と表現している。

2. 叢書『世界童話大系』

松村武雄「アイヌ童話集」を検討する前提として、まず出版社、シリーズについて記述する。その後で、「アイヌ童話集」を収録した第 16 巻『日本篇』の刊行状況について整理する。それは、これまで「アイヌ童話集」を資料として扱った『通観』においても編著者に混乱が見られるように、『世界童話大系』およびその後継のシリーズ自体の刊行状況がよく把握されていると言える状況にないからである。また、このシリーズがいかに出版され続けてきたかを明らかにすることは、出版史における位置づけを行うという点でも、その一般への影響を明らかにするという点でも重要であると筆者は考える。

2-1. 発行元の近代社

『日本篇』は1924（大正13）年に刊行された。発行者は吉澤孔三郎で、発行所は世界童話大系刊行会である。発行元は明記されていないが、近代社である（宍戸1993:39）。近代社の創業、廃業年は不明だが、吉澤孔三郎という人物によって経営されていた出版社である。出版史において、近代社と吉澤孔三郎に関するまとまった言及は発見されていない（小田2008:186）。以下、近代社については小田（2008:183-193）の記述に従う。1923（大正12）年から1927（昭和2）年にかけて、『近代劇大系』（全16巻〔発行所は近代劇大系刊行会⁷⁾〕、『世界短篇小説大系』（全16巻、1925年～）、『古典劇大系』（全19巻、1924～27年）、『世界童話大系』（全23巻、1924～28年）、『神話伝説大系』全18巻（1927～29年）のような全集物を刊行している。この『世界童話大系』の刊行後、円本時代を迎えて、昭和2年に第一書房の『近代劇全集』に対抗し、近代社は『世界戯曲全集』を計画した。しかし、長谷川卯之吉「近代劇全集完了の御挨拶」（1931年）によると、「債権者の蹂躪に依って見るかげもなくなり」（関口・布川1984:33）、近代社は倒産してしまったのだという。そのため、近代社が倒産した後の『世界童話大系』は、別の出版社から刊行されることになる。

2-2. 叢書『世界童話大系』の内容と普及状況

1924（大正13）～1928（昭和3）年に刊行された『世界童話大系』（全23巻）は、世界各国の名作古典、寓話、民話、神話、童話などを国別、分野別に系統立てて、集大成した全集であり、規模、質の点でも翻訳児童文学史上、画期的な出版とされる（宍戸1993:39）。小田（2008:188）は、瀬田（1982:329-331）を除いて、日本の児童文学の通史や翻訳史でもほとんど言及されていないとするが、児童文学関係の事典では多くの場合、「世界童話大系」の項目が立てられているほか（伊達1988; 宍戸1993）、それぞれの童話集ごとに先行文献で言及されている。松村武雄が中心となり、当時の一流の文学者が翻訳に当たっている。グリム童話やロシアの児童文学などを除いて、英語圏以外の作品は英訳本が底本となったが、イエイツ（William Butler Yeats）、グレイヴズ（Alfred Perceval Graves）の童話集、アラビヤナイト等は、本大系によってはじめての全訳として日本に紹介された（宍戸1993:39）。中でも、金田鬼一による『グリム童話集』の翻訳（グリム1924-27）は最初の『グリム童話』全訳本であり⁸⁾、1929（昭和14）年には岩波文庫から、改訳したうえで刊行された（グリム1929）。その「徹底的改訳増補版」（グリム1979:10〔第1巻の訳者序〕）は、現在でも『完訳グリム童話集』（グリム1979）として店頭で入手可能で、『グリム童話』の基礎的な文献となっている。

内容、構成は子供よりむしろ大人に向けたものであったとされるが（宍戸1993:39）⁹⁾、小田光雄がすでに指摘するように、半数以上に魅力的な挿絵が入っており、さらに投げこみに記された数字から判断して、予約購読者が1万人ほどいたことになり、かなり「普及」していたと考えられる（小田2008:191）。実際、2-3節で述べるように『日本篇』は何度も刊行されている。予約会員には4円80銭で販売されたという（宍戸1993:39）。三島由紀夫も、子供の頃の思い出を語る中で『世界童話大系』について触れている（小田2008:191）。

「アイヌ童話集」に関して言えば、1924（大正13）年刊のものには挿絵がついていないが、1929（昭和4）年刊のものには平賀輝彦による挿絵がいくつかつけられている。解説を除いて、初版の1924年刊のものから、漢字にはすべて振り仮名がつけられており（「ア

イヌ童話集」には、原典に基づいたアイヌ語のルビが付されていることもある)、子供向けの配慮が行われている。なお、作家、詩人、翻訳家として著名な矢川澄子も「本つてものの原点は、やっぱり何とんでもこれ、『世界童話大系』なんですよ」(矢川・武村 1997: 87)と語っているだけでなく、「アイヌ童話集」の存在にも触れ、「日本の童話の巻にはちゃんとアイヌの童話も入ってるんですよ。すごく目くぼりが行きとどいてる」(矢川・武村 1997: 80)と述べている。

2-3. 松村武雄『日本篇（世界童話大系 第16巻）』とその変遷

1924(大正13)年刊『日本篇』は、「日本童話集」、「朝鮮童話集」、「アイヌ童話集」から構成されており(このシリーズには「琉球童話集」もしくは「沖縄童話集」は見られない¹⁰⁾、巻頭には松村による解説が付されている。松村が朝鮮とアイヌを『日本篇』に組み込む編集体制をとったことは、当時の朝鮮と日本の関係、アイヌと日本の関係の反映である(パク 2015: 92)。さらに1929(昭和4)年に近代社から刊行されたものは、「朝鮮童話集」と「アイヌ童話集」に、第15巻『支那・台湾篇』に収録されていた「台湾童話集」、「生蕃童話集」を合わせた『朝鮮・台湾・アイヌ童話集(世界童話全集)』(松村・西岡 1929)となっている¹¹⁾。

なお、1928年にも『世界童話大系』として『日本篇』が再版されているが、この時点での発行者は吉澤孔三郎、発行所は世界童話大系刊行会(東京市京橋区南伝馬町)となっている。前述のように、後に発行所の世界童話大系刊行会および近代社は倒産する。その倒産後は別の出版社から刊行されることになる。本稿では、初出の『日本篇』に掲載の「アイヌ童話集」を基にするが、「アイヌ童話集」が、どのように刊行され続けたのか、簡単に整理しておきたい。

「アイヌ童話集」は当初、『日本篇』に収録されていたものの、後には松村武雄著「日本童話集」と分離され(こちらは『日本童話集(世界童話全集)』(松村 1928)として1928(昭和3)年に近代社より刊行)、1929(昭和4)年には、松村武雄著「朝鮮童話集」、西岡英夫編「台湾童話集」、西岡英夫編「生蕃童話集」とともに『朝鮮・台湾・アイヌ童話集(世界童話全集)』(松村・西岡 1929)の一部となっている。この編集人兼発行人は松元竹二である(『通観』で本書が「松元童話」と呼ばれる所以)。発行所は近代社だが、住所は牛込区若松町に変更されている。なお、近代社は、円本企画『世界戯曲全集』によって破産に陥るが、1928(昭和3)年の『日本童話集(世界童話全集)』も、編集人兼発行人は松元竹二であることからして、この時に近代社は倒産に向かっていたと思われる¹²⁾。小田(2020: 614)は、松元は近代社の社員で、吉澤の身代わりとして発行者にすえられ、破産の後始末を担うことになったのだろう、と推測している。

『世界童話大系』と同じ内容のものは、その後、出版社を変えながら、何度か刊行される。1931(昭和6)年には、誠文堂から、松村武雄著(外箱には「訳」とある)『日本童話集 上・下(世界童話大系 1,2)』(松村 1931)が出版されている(箱及び表紙には上篇の挿絵は川上四郎、下篇の挿絵は村山知義によるとあり、前述の平賀輝彦の名はない)。この『日本童話集』の下巻には、松村武雄著「朝鮮童話集」、西岡英夫編「台湾童話集」、西岡英夫編「生蕃童話集」、松村武雄著「アイヌ童話集」が収録されている。これは1929(昭和4)年刊の『朝鮮・台湾・アイヌ童話集(世界童話全集)』(松村・西岡 1929)と同じ構成で、松元竹二が編集者として表示されているのも同様である。誠文堂は、倒産した近代社の紙

型を買い取って出版したのだと推測される（小田 2019: 554）¹³。この誠文堂版の『世界童話大系（普及版）』（全 20 巻）とタイトル、内容、版型とも同一のものが、1933（昭和 8）年に、金正堂（東京市神田区錦町）から、『日本童話集 上・下（世界童話大系 1,2）』（松村 1933-34）として出版されている。上巻（「日本童話集」のみ含む）は 1933（昭和 8）年に出ており、編集者（表紙には「著」とある）は松村武雄である。下巻はその翌年に出ており、編集者は松元竹二となっている。1989（平成元）年には、名著普及会から、大正 13 年刊『日本篇』の複製が刊行されている（松村 1989）。以上、「アイヌ童話集」の部分に限っても、少なくとも 3 つの出版社から、5 回出版されていることになる¹⁴。近年、金廣植による韓国語訳が出版されている（松村 2018）。

3. 「アイヌ童話集」

「アイヌ童話集」は、上述のように『日本篇』に収録されている。『日本篇』におけるそれぞれの童話集の配分は不均衡で、「日本童話集（日本の部）」は 1～722 頁（計 174 編 722 頁）、「朝鮮童話集（朝鮮の部）」は 723～801 頁（計 23 編 78 頁）、「アイヌ童話集（アイヌの部）」は 805～925 頁（計 73 編 120 頁）となっている。この話数、頁数の差は、すでに指摘されているように、日本の童話が豊かで、朝鮮およびアイヌの童話は非常に貧弱であることを印象付けている（パク 2015: 88）。また、「日本童話集」、「アイヌ童話集」には神話を含めた民話が収録されているが、「朝鮮童話集」では神話が排除されている（パク 2015: 92-93）。この編集方針が何を意味するのかは定かではないが（単に松村が朝鮮の神話を収集できなかったという理由もあるか）、松村は「文化民族は、かつて神話を生み、而していまは産み出さなくなった民族である」とする（松村・中村編 1979: 3）。「日本童話集」において神話を含めたのは、日本が古くかつ今は文化民族となっていることの証左とし、「アイヌ童話集」において神話を含めたのは、「自然民族は神話を産みつつある民族」であることを示そうとしたのではないかと疑念を抱かせる。そこで、以下では、「アイヌ童話集」の編集背景を見ていくことにする。

3-1. 「アイヌ童話集」の編集背景

自分自身でアイヌの民話を調査したことのなかったと思われる松村が、「アイヌ童話集」を編集した背景には、時代状況と松村が比較神話学者であることが関わっていると思われる。日本が植民地支配を拡大させていった時代において、日本を対象とした民話集にアイヌ、琉球、朝鮮の民話が含まれるようになる。『日本篇』と刊行年の近い『日本昔話集 下』（金田一ほか 1929）にもアイヌ、琉球、朝鮮のものが含まれている。いつ頃から、日本の民話集にアイヌのものが含まれるようになったのかは定かではないが、筆者が確認した限りでは、1911（明治 44）年に出版された『日本全国、国民童話』（石井 1911）が最も古いものである。これは、各地方から来た人にたずねて、地方昔話の口授や筆録を得たもので、その中に琉球 1 編、台湾 3 編、北海道 2 編、樺太 1 編、朝鮮 1 編が含まれている¹⁵。

とりわけ英語圏の比較神話学研究に親しんでいた松村にとって、この時期にアイヌ民話の記録を集めることは比較的容易なことであったと思われる。この時点で、松村武雄は金田一京助を当然知っていたはずであるが（『郷土研究』に金田一京助が発表した論考からも再話を行っている）、『日本篇』の名のもとに「日本童話集」、「朝鮮童話集」、「アイヌ童話集」を包括し、それらを比較する意図を持っていた松村が、朝鮮、アイヌに関する文化的

知識を十分に持たないにもかかわらず¹⁶、自らの意図する児童を念頭に置いた童話集にすべく、全てを担当することにしたのではないかと思われる。松村の研究においては、書承の神話および人類学者による民話記録など、文献資料を用いることが普通であり、自ら採集した民話を用いていない。松村自身も『郷土研究』の同人であり、寄稿もしているものの、当時の民俗学に一般的に見られる、現地に暮らす人自らが記録、もしくは現地に入って採集を行う方針とは差異が見られる。

前述したとおり、「アイヌ童話集」を含むシリーズの変遷は複雑であるが、「アイヌ童話集」に収録された民話はいつ刊行されたものであっても73編で内容も同一である。そのすべてが他の報告からの再話であると思われる¹⁷。この当時、『郷土研究』に加わっていた金田一京助は、自らが採集した民話を報告しており、一般向けの童話集を編集するにあっても、アイヌ語で記録した物語を、原文を損なわないように日本語訳して紹介していることと対照的である（金田一ほか1929；金田一1948；金田一ほか訳1954参照）。個々の民話の出典を松村が明記していないこともあり（それ以上に「アイヌ童話集」の研究がほとんどない）、これまで、原典と松村による再話の比較検討はされていない。

3-2. 「アイヌ童話集」の原典

1924（大正13）年の「アイヌ童話集」の公刊までに松村が利用出来た資料はそれほど多くないが、この当時に利用できるかなりの文献を渉猟していたことが伺える¹⁸。松村自身が述べるように、「自分がチェームバレン氏やバツチェラー氏や、金田一京助氏、吉田巖氏等の著書を通して、また自分自身の努力を通して」（松村1924：解説11-12）この童話集をまとめたのだという（「自分自身の努力」というのは、自分でアイヌ民話を採集したという意味ではなく「童話」としてまとめたという意味だろうか）。ただし、ここで言及されていない鳥居龍蔵の著作も参照していることを筆者は確認した。73編のうち第45話を除いて、原典もしくは、原典を収集者本人が再録したものを明らかにすることができた（詳細は本稿の付録参照）。「アイヌ童話集」は基本的に、B・H・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）、J・バツチェラー（John Batchelor）、鳥居龍蔵、金田一京助、吉田巖が発表した物語を基に、童話として構成し直したものである。

3-3. 「アイヌ童話集」の解説とその問題点

松村が活躍しはじめた1920年代から1945年の敗戦までの期間の重要な特徴は、大林（1972：163）によれば、「民族学の知識や理論を日本神話に適用する学風が顕著になったことである」という。戦後の神話研究にも大きな影響を与えているにもかかわらず、松村が神話と民族性および皇室信仰の重要性について扱った著作に関しては、時代背景を多分に持ったものであるためか、大林（1971）でも言及されていない。

松村が1930年代に行った研究では神話に民族性を見出す態度が観察されることを平藤（2010：314-321）が指摘しているが、1924年に刊行された『日本篇』においてもその態度が強く見られる。松村は解説において、執拗に文化民族と自然民族（未開民族）を対比する。この枠組みは、松村が解説で名前を挙げるようにフィヤークアント（Alfred Vierkandt）の『自然民と文化民』（Naturvölker und Kulturvölker）から採られたものである。後の金田一ほか訳（1954：373-376）における松村の解説でも、このフィヤークアントが紹介されており、戦後においてもなお、文化民族と自然民族という枠組みを脱していない。松村は、（自らも

属すると信じる)「文化民族」と「自然民族」の明確な差異を信じて疑わず、その枠組みをアイヌにも当てはめ、アイヌを「未開民族」とし¹⁹、その物語を「未開民族の説話」として描いている²⁰。松村は、「文化民族」と「未開民族」の説話には明確な差異があるとし、それと比較することによって日本が優れた「文化民族」であるとしているのである(イ 2018: 441-442)。

朝鮮に関しても、独自の話型があることなどを指摘しつつも、インド、中国はもちろん西洋文化を伝えて日本の文化を多様にする「文化の仲介者」(解説 7 頁)としての役割を付与するだけであり、朝鮮文化の独創性と歴史に価値を置いていない(パク 2015: 89)²¹。そして、「日本は世界各国、インド、中国を越えて西洋文化まで受容・蓄積して自国文化に融和させる優れた『文化民族』であることを強調する日本優越主義の姿をはっきりと見ることが出来る」(パク 2015: 92、拙訳)が、このことによって「文化民族」である日本による植民地支配が正当なものであると、読者は受け取ったのではないかと思われる。

さらに、松村は、アイヌの「童話」は「道徳的規準も概ね低くて、文化人の見地からすると、行為の価値に対する判断が錯倒してあると思はれるものが多く、これは「狡才を尊重した未開時代の反映」であるとする(解説 12 頁)。しかし、「行為の価値に対する判断が錯倒してあると思はれるもの」として松村が挙げる物語(『狐の仮病』『上の者と下の者』中のある物語等)は、アイヌの民話において、特殊な物語群であり、特に「上の者と下の者」すなわちパナンペ・ペナンペ譚は、アイヌ自身、「子供だましの話」、「あまり語る価値のない話」として捉えているものである(中川 2020: 131)。日本昔話でも往々にして日常の倫理観と外れる振る舞いが見られるし、松村も「文化民族の童話にも屢々その痕をとどめてはみるが」と書きはするが、なぜか「アイヌの童話に於ては殊にそれが目に立つ」のだとする(解説 12 頁)。「未開民族」の説話の特徴とされるものが「文化民族」に見られたとしても、それは文化民族が「未だ低い文化階層にみたときの精神的産果」(解説 10 頁)である、との判断を下すことで、説話の共通性を解決する。いずれにせよ、松村の解説は、「説話」それ自体の分析から出発したものとは思われず(説話の共通性も「文化民族」、「自然民族」という枠組みのもとでは意味を付与されていない)、現実の支配・被支配という政治的な力関係を基に、アイヌを自らとは異なった「未開民族」であるとし、その「説話」を、「文化民族」と「自然民族」という枠組みに押し込んでいる。

児童をも読者として想定した『世界童話大系』およびその後継のシリーズにおいて、日本神話学の権威者が行ったこのような言説が、植民地主義を支える一翼となったことは明らかである。なお、平藤(2010: 321)の指摘にある通り、松村の神話から民族性を論じるという研究は自らの神話研究の集大成には含まれていない。あくまで、一般向け、児童向けであったのではないかと思われる。児童の精神の涵養にこうした思想を喧伝する必要があるのだと認識していたために、童話集である『日本篇』にこうした態度が強く表れている可能性がある。

3-4. 「アイヌ童話集」に収録された「童話」の特徴

「アイヌ童話集」73 篇は既刊のものからの再話である。Batchelor (1901) からは 28 編、チェンバレン『アイヌ民話』(Chamberlain 1888) から 23 編の再話を行っている。そのほか、『郷土研究』に掲載の吉田巖の報告(15 編)や金田一京助の報告から採られたもの(4 編)、鳥居龍蔵によるフランス語の報告から再話を行ったものが 2 編確認できる。第 45 話の原

典は不明である（詳細は付録参照）。

「アイヌ童話集」で扱われているのは、前述のパナンペ譚をはじめとした3人称で語られる物語がほとんどで、本格的なアイヌ民話で最も普通のスタイルである、特定の登場人物の視点から語る自叙体の物語ではない（「アイヌ童話集」の前年に刊行された知里幸恵（1923）収録の物語はまさに自叙体の物語である）。当時としても、パチェラーやB・ピウスツキ（Bronisław Piłsudski）、金田一京助、吉田巖によって比較的長編で本格的な物語が紹介されている（特にパチェラーはBatchelor（1888-93）において、かなり早い時期に英雄叙事詩を原文対訳で公刊している）ことを考えれば、こうした自叙体の物語が「アイヌ童話集」に含まれていないのは、日本の児童に向けた読み物としてふさわしい童話と判断されなかったことがあるのかもしれない。しかし、松村は解説において「日本の『天稚彦物語』や、朝鮮の『失策つづき』のやうな形式が長くて、内容が複雑なものは殆んど見出し難い」（解説12頁）としていることからして、やはり、資料を適切に把握できていなかったのだと思われる。

「アイヌ童話集」収録物語のうち、23編はチェンバレンの『アイヌ民話』（Chamberlain 1888）からの再話であるが、『アイヌ民話』はこの当時の民話集としてよくまとまっているものであり、松村が大いに参考にしたであろうと思われる。前述のように、松村の解説は、アイヌの本格的な物語の存在を指摘することなく、自らの属する社会の文化の優位性を信じて疑わないまま書かれたものである。チェンバレンにもそうしたところが多く見られる。また、チェンバレンは、まさに松村が「アイヌ童話集」で再話を行ったような物語と、ほとんど旋律を持たない幾つかの歌以外にアイヌに文学はないと断じている（Chamberlain 1887: 37）。松村もその影響を受けた可能性はあるが、チェンバレンと異なる点は、アイヌ語やアイヌの神話的題材に日本の影響を見ようとする態度（Chamberlain 1887: 40-41）を、松村があまりとってはいないことである。

今から見れば外来（おそらく日本昔話の移入）と考えられる物語であっても、異なる地域で独自に発展したものとみている節もある。特に第43話「アイヌ桃太郎」は松村が注目していた物語らしく、『標準お伽文庫』中「桃太郎について」（松村の手になると考えられる²²）では、中国にも似た例があることを指摘しつつ、アイヌの桃太郎〔オムタロ om-taro 「股（もも）-太郎」〕を紹介し、「殊にアイヌの童話のオムタロのオムは股（桃と発音向じ）で、タロは即ち太郎であります。桃から生れたのではなくて、股から生れたとすところに、余程原始的な味が含まれているではありませんか」（森ほか編 1973: 364）と述べている。この物語は、日本昔話のモモタローを股-太郎と解し、om-taro「股-太郎」との名を持つものの話に置き換えたものではないかと思われる。このアイヌの桃太郎がどのジャンルに当たるものかは記されていないが、隣の爺譚になっていることからして、パナンペ譚など同様のジャンルかと推測される²³。

おわりに

本稿では「アイヌ童話集」の刊行状況とその原典を明らかにし、解説から伺える松村の恣意的な解釈について述べた。「アイヌ童話集」73篇は既刊のものからの再話である。パチェラーやチェンバレンの記録のほか、吉田巖や金田一京助の報告から採られたものもある。また、鳥居龍蔵の報告から再話を行ったものもある（以上、個々の物語の原典に関しては付録を参照）。

「アイヌ童話集」は、1924年に初めて刊行されて以来、出版社を何度も変えながら刊行され続け、神話および民話の研究に対してだけでなく、日本の児童にも大きな影響を与えたとと思われる。三島由紀夫や矢川澄子が『世界童話大系』に言及していることは前述した通りである。英語、フランス語で発表されたアイヌ民話を日本語で紹介したという点や、入手し難い文献から取り上げた物語があるという点は「アイヌ童話集」の功績と言えるかもしれないが、平藤（2010: 314-321）が指摘した、松村とナショナリズムとの関わりが解説部分に強く反映されており注意が必要である。松村は民話から恣意的に民族性を読み取り、それと対比することで日本が優れた「文化民族」であることを示している。民話の検索にしばしば用いられる『通観』などによって、今後も民話研究で参照される可能性があることや、戦後にも名著普及会によって復刻され今なお一般に影響を与えうることを考えれば、こうした背景を捨象して「アイヌ童話集」を単なる民話資料として用いることには慎重である必要がある。

本稿は「アイヌ童話集」の研究の予備段階として、刊行状況および原典に関して整理を行い、解説に現れた松村の態度について若干の検討を行った。同時代の別の童話集との性格の違いの検討や、「朝鮮童話集」に見られた松村による意図的な改作と同じような例があるかなどに関しては何ら指摘できていない。松村による再話の詳細な検討は今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたって金正堂版『日本童話集』の現物の確認にあたって欠ヶ端和也氏にご協力いただいた。お礼申し上げます。貴重なコメントを下された2名の匿名の査読者の方にも感謝申し上げます。

注

- 1 本稿では、引用を除き、神話、伝説、童話などをまとめて指し示す必要がある場合、伝説及び世間話とともに1つの区分をなす昔話ではなく、より広い範囲を指し示す「民話」を用いる（一般的な用法として、説話は書承の物語の印象が強く、昔話は「事実ではない」と認識されているため、それ等の用語をアイヌの口承文芸に当てはめることは必ずしも適切だとは考えられないというのが理由である）。
- 2 近年では安田（2019: 20-21 及び註7）が民話資料として「松元一九二九」[そのうちの第41話 金線魚の話]を参照したと表示している（タイトル、日時、梗概は吉田著、帯広市教育委員会社会教育係編（1957: 103-104）に基づいていると思われる）。なお、この物語の初出は吉田（1914c: 745-746）であるが、吉田著、帯広市教育委員会社会教育係編（1957）と結末部分に多少の差異がある。
- 3 『通観』には1929（昭和4年）年の「松元童話」として引用されており、実質的な編著者である松村武雄の名前はない。なお、「松元」は編集人兼発行人と表示される松元竹二のことである。
- 4 松村（1943: 169）によれば、森鷗外に松村を引き合わせたのは馬淵冷佑である。小田（2020: 616）によれば、馬淵は松村の妻の姉、山崎光子（水田光）の同僚であるという。山崎光子は松村から英語を学び、童話や神話伝説の翻訳者となったという。馬淵と山崎の共著もあるほか、山崎は『世界童話大系』の後に出る『神話伝説大系』の訳者の一人にもなっている。
- 5 のちに東洋文庫から『日本お伽集1,2』として刊行されている（森ほか編1972, 1973）。
- 6 『日本篇』のうち、「日本童話集」では、松村による再話とともに、『標準お伽文庫』の物語の全てがそのまま転載されており、『世界童話大系』との関連でも『標準お伽文庫』の影響は無視できない。
- 7 発行者は佐藤義亮〔新潮社の創立者、小田（2008: 187）は〔その息子の〕義夫とするが、国立国会図書館所蔵の第1巻（info.ndljp/pid/972254）では義亮と訂正があり、年代から言っても義亮が

- 正しい]と吉澤孔三郎の二人で、住所も東京市牛込区矢来町で新潮社と同じであるため、近代社と新潮社との共同出版だと考えられる(小田 2008:187)。ただし、1924(大正13)年に刊行された『日本篇』では、発行者の住所は東京市板橋区南伝馬町である(復刻版の奥付による)。
- 8 野口(2016:193)には、「最初の[註一『グリム童話集』の]全訳本が出るのは昭和3年から4年で、岩波文庫(1-7巻)から金田鬼一訳で出版される」とあるが、訳者の金田自身が岩波文庫版の序で述べているように、最初の全訳が刊行されたのは『世界童話大系』においてである。
 - 9 瀬田(1982:331)は「子どものものではなかった」とする。しかし、小田(2008:190)で指摘されるように、その指摘の根拠となっている部分には正確でない部分がある。
 - 10 例えば、近い時期に刊行された『日本昔話集』は、上巻が狭義の日本の民話を扱っているのに対し、下巻はアイヌ・朝鮮・琉球・台湾を扱っている(金田一ほか1929)。
 - 11 植民地支配を受けている地域の童話集を一冊にまとめたものになっている。編輯者の表示が変わっていることからして、これは松村の意向ではなかったと推測される。
 - 12 前述の金田鬼一訳のグリム童話は1929年に岩波文庫に収録されているが、『世界童話大系』に収録されたものが、どういった経緯で岩波書店から公刊されることになったのかは不明である。1929年にも近代社から『世界童話全集』として『グリム童話集』が刊行されていることを考えればなおさらである。1930~31年にも『世界童話大系』第14~15巻として誠文堂から刊行されている。
 - 13 小川菊松の経営する誠文堂は、もともと近代社で刊行された『世界戯曲全集』や『世界神話伝説大系』(『神話伝説大系』の改組)を、判型を縮小して刊行しているが、近代社の紙型を買取っての出版だと小田は推測している(小田2019:554)。『世界童話大系』も同様の道筋をたどったのだと思われる。
 - 14 金廣植、李市峻によれば、1924年の初版発行以来、少なくとも3つの出版社から書名を変えて22刷以上の増刷を重ねたという(金・李2015:170)。
 - 15 北海道及び樺太のものはアイヌのものと思われる。北海道の2編は『蝦夷島奇観』が原典であると思われ、口述を書き取ったものとは思われない。東洋を中心とした童話集に組み込んだものとしては、『世界童話集—東洋の巻—』(榎本1918)がある。アイヌの伝承を3編取り上げているが、全てChamberlain(1887-89)からの再話だと思われる。
 - 16 バク(2015:97-98,注40)が指摘するように、朝鮮説話によく登場するチゲ「背負子」の形を、松村は片方ずつ背負う形で描写しており(参考「朝鮮童話集」の「親を捨てた男」)、朝鮮文化に関する十分な知識がないことによる誤解が見られる。
 - 17 「朝鮮童話集」も同様に先行文献からの再話である。その原典は、金・李(2015:171-173)を参照のこと。「朝鮮童話集」における改作に関してはバク(2015)が詳しい。
 - 18 ピウスツキによる民話集(Pilsudski 1912)を松村は入手できていないと思われる。
 - 19 松村のこの認識は、後の『東洋童話集』においても、アイヌを未開民族と文化民族の中間に位置づけたこと以外に、変更されていない(金田一ほか訳1954:373-376)。松村による位置づけの変化には、金田一京助をはじめとしたアイヌ文化研究者によって、アイヌ文学の全体像が明らかにされていったことが関係する可能性があるが、枠組み自体はこの時点に至ってもなお放棄されていない(『東洋童話集』では、アイヌの部分を松村ではなく金田一京助が担当している)。
 - 20 松村の比較神話学は進化主義的前提に立つものであったことはすでに指摘されている(大林1971:1370-1372)。非常に残念なことに、この松村による「解説」は、『現代児童文学辞典』の「アイヌの神話」という項目(土橋1958)にほぼそのまま引き継がれている。
 - 21 日本と朝鮮の神話の比較研究を行った歴史・神話学者の三品彰英の著作にも同様の認識が見られ(三品1940:1)、「日帝の植民主義的韓国史観を理論的に体系化したもの」とされる(李2005:246)。
 - 22 後の鈴木三重吉との共著で、松村の署名入りの「解説—お父さん、お母さん方に—」で、同様のことが記述されている(松村・鈴木1953:216)。
 - 23 外来のモチーフ、話型が広く確認されるパナンペ譚では、oni「鬼」、konoyaro「この野郎」などの日本語がしばしば見られる(知里編訳1981:255)。なお、この「アイヌの童話のオムタロ」は吉田(1913a)が初出であり、「明治四十一年六月九日教弟十勝アイヌ赤築テイチにつきて得たるもの」だという。

引用文献

引用文献のうち、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できるものは [] で URL を追加した。韓国語の人名は本人が使用するローマ字表記を併記し、分かる場合は漢字表記も併記した。

Batchelor J.

1901 *The Ainu and their folklore*, The Religious Tract Society, London.

1888-93 Specimens of Ainu folk-lore. *Transactions of the Asiatic society of Japan* 16 (2): 111-154, 18 (1): 25-85, 20 (2): 216-227.

Chamberlain B. H.

1887 *The language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies (Memoirs of the literature college, Imperial university of Japan, no. 1)*, Imperial university, Tōkyō.

1887-89 *Aino fairy tales* no.1-3, Kobunsha, Tokyo; Ticknor & Co., Boston.

1888 *Aino folk-tales*, The folk-lore society, London.

Pilsudski B.

1912 *Materials for the study of the Ainu language and folklore*, Cracow.

Torii R.

1919 Études archéologiques et ethnologiques des Ainou des îles Kouriles. *Journal of the college of science, Imperial university of Tokyo* 42.

イ・ヒョンジン (이현진 [李賢珍]) (Lee, Hyun-Jin)

2018 「일제강점기에 간행된 <일본동화집> 연구 [日帝強占期に刊行された『日本童話集』研究] 『日本語文学』 82: 435-454. 【韓国文】

李萬烈 (YI, Mahn-Yol)

2005 「近現代韓日関係研究史—日本人の韓国史研究を中心に—」日韓歴史共同研究委員会編集『日韓歴史共同研究報告書(第1期)』第3分科篇下巻、日韓歴史共同研究委員会、東京、223-256.

石井研堂

1911 『日本全国、国民童話』同文館、東京。[info:ndljp/pid/1168188]

稲田浩二、小澤俊夫(編)

1989 『日本昔話通観 第1巻 北海道(アイヌ民族)』同朋社、京都。

植島啓司

1975 「松村武雄論」『季刊柳田国男研究』 8: 187-205.

榎本秋村

1918 『世界童話集—東洋の巻—』実業之日本社、東京。[info:ndljp/pid/959362]

大竹聖美

2001 「1920年代 日本 의 児童叢書와 「朝鮮童話集」/1920年代 日本の児童叢書と「朝鮮童話集」」『동화와 번역 [童話と翻訳]』 2: 5-32. 【韓国文】

大林太良

1971 「松村神話学の展開—ことにその日本神話研究について—」『文学』 39 (11): 1366-1376.

1972 「日本神話の研究史」『国文学 解釈と鑑賞』 37 (1): 162-164.

小田光雄

2008 『古本探求』論創社、東京。

2019 『近代出版史探索』論創社、東京。

2020 『近代出版史探索V』論創社、東京。

金廣植、李市垞 (Kim, Kwang-sik & Lee, Si-jun)

2015 「마쓰무라 다케오(松村武雄) 『일본동화집(日本童話集)』의 출전 고찰/松村武雄の『日本童話集』における出典に関する考察」『日語日文学研究』 16: 165-187. 【韓国文】

金田一京助

1914a 「アイヌ教祖オキクルミ伝説(上)」『郷土研究』 2 (1): 34-40.

1914b 「アイヌ教祖オキクルミ伝説(下)」『郷土研究』 2 (2): 91-97.

1948 「上篇 北海道の部」金田一京助・知里真志保共編『りくんべつの翁 アイヌの昔話(世界

- 昔ばなし文庫』彰考書院、東京、1-131.
- 金田一京助、田中梅吉、伊波普猷
1929 『日本昔話集 下巻 (日本児童文庫 12)』アルス、東京。(奥付には日本童話集とある)
- 金田一京助ほか(訳)
1954 『東洋童話集 (世界少年少女文学全集 25 東洋編 1)』創元社、東京.
- グリム・ヤーコップ、グリム・ウィルヘルム (Grimm, J. & Grimm, W.)
1924-27 金田鬼一(訳)『独逸篇 (世界童話大系 第 2-3 巻)』世界童話大系刊行会、東京.
1929 金田鬼一(訳)『全訳 グリム童話集 (岩波文庫 471~478)』岩波書店、東京、1-7.
1979 金田鬼一(訳)『完訳 グリム童話集 (岩波文庫 413-1~5)』岩波書店、東京、1-5.
- 佐々木宏幹
1977 「日本神話研究と民族学」『講座日本の神話』編集部(編)『日本神話研究の方法 (講座日本の神話 1)』有精堂、東京、35-59.
- 宍戸寛
1993 「世界童話大系」大阪国際児童文学館(編)『日本児童文学大事典』3、大日本図書、東京、39-40.
- 関口安義、布川角左衛門
1984 「第一書房 長谷川巳之吉—生涯と事業—」林達夫、福田清人、布川角左衛門(編著)『第一書房 長谷川巳之吉』日本エディタースクール出版部、東京.
- 瀬田貞二
1982 『落穂ひろい』下、福音館書店、東京.
- 伊達安子
1988 「世界童話大系」日本児童文学学会(編)『児童文学事典』東京書籍、東京、423-424.
- 知里真志保(編訳)
1981 『アイヌ民譚集一付、えぞおばけ列伝 (岩波文庫 赤(32)-081-1)』岩波書店、東京.
- 知里幸恵
1923 『アイヌ神謡集 (炉辺叢書)』郷土研究社、東京.
- 土橋里木
1958 「アイヌの神話」古谷綱武ほか(編)『現代児童文学辞典』修正版、宝文館、東京、1-3.
- 鳥居龍蔵
1976 小林知生(訳)「考古学民族学研究・千島アイヌ」『鳥居龍蔵全集』5、朝日新聞社、東京、311-533.
- 中川裕
2020 『改訂版 アイヌの物語世界 (平凡社ライブラリー899)』平凡社、東京.
- 野口芳子
2016 『グリム童話のメタファー 固定観念を覆す解釈』勁草書房、東京.
- パク・ジョンジン (박종진 [朴鍾振]) (Park, Jong-jin)
2015 「마쓰무라 다케오 『일본동화집』 <조선부>의 개작 양상 연구 [松村武雄『日本童話集』(朝鮮部)の改作様相研究]」『아동청소년문학연구 [児童青少年文学研究]』16: 81-117. 【韓国文】
- バチエラ・ジュー (Batchelor, J.)
1901 著者助手(訳)『アイヌ人及其説話』中編、教文館、東京. [info:ndljp/pid/767829]
- バチラー・ジョン (Batchelor, J.)
1995 安田一郎(訳)『アイヌの伝承と民俗』青土社、東京.
- 平藤喜久子
2010 「植民地帝国日本の神話学 昭和前期の日本神話研究を中心に」竹沢尚一郎(編著)『宗教とファシズム』水声社、東京、311-347.
- 松前健
1966 「(3) 神話 (伝説・昔話・俗信を含む)」日本民族学会(編)『日本民族学の回顧と展望』財団法人日本民族学協会、東京、181-193.
- 松村武雄
1924 『日本篇 (世界童話大系 第 16 巻)』世界童話大系刊行会、東京. [1924 年(?)版 :

- info:ndljp/pid/978864／1928年版：info:ndljp/pid/1717850]
- 1928 『日本童話集（世界童話全集）』近代社、東京。（編輯人は松元竹二と表示されている）
- 1931 『日本童話集 上・下（世界童話大系 普及版 1,2）』誠文堂、東京。
- 1933-34 『日本童話集 上・下（世界童話大系 普及版 1,2）』金正堂、東京。
- 1943 『疎鐘』培風館、東京。
- 1989 『日本篇（世界童話大系 第16巻）』名著普及会、東京。
- 2018 김광식(金廣植／Kim, Kwang-sik) (訳) 『마쓰무라 다케오의 조선·대만·아이누 동화집 [松村武雄の朝鮮・台湾・アイヌ童話集]』보고사 [宝庫社]、과주 [坡州]. 【韓国文】
- 松村武雄、鈴木三重吉
- 1953 『いっすんぼうし（日本おとぎ文庫3）』あかね書房、東京。
- 松村武雄、中村亮平
- 1979 『中国・台湾の神話伝説（世界神話伝説大系11）』名著普及会。
- 松村武雄、西岡英雄（編）
- 1929 『朝鮮・台湾・アイヌ童話集』近代社、東京。[info:ndljp/pid/1717854]
- 三品彰英
- 1940 『朝鮮史概説（教養文庫39）』弘文堂書房、東京。
- 向川幹雄
- 1993 「松村武雄」大阪国際児童文学館（編）『日本児童文学大事典』2、大日本図書、東京、159-161。
- 森林太郎ほか（編）
- 1972 『日本お伽集1（東洋文庫220）』平凡社、東京。
- 1973 『日本お伽集2（東洋文庫233）』平凡社、東京。
- 矢川澄子、武村知子
- 1997 「ばら色の雲を紡いで、透明にして インタビュー」『ユリイカ』29(12): 84-101.
- 安田千夏
- 2019 「北海道アイヌの口承文芸「カラス神の人さらい子育て」の西進」『口承文芸研究』42: 16-31.
- 吉田巖
- 1913a 「アイヌの桃太郎童話」『郷土研究』1(6): 346-348.
- 1913b 「アイヌ童話」『民俗』1(2): 112-113.
- 1914a 「アイヌ童話」『民俗』2(1): 36-39.
- 1914b 「アイヌの動物説話（一）（其一、鳥類説話）」『郷土研究』1(11): 672-676.
- 1914c 「アイヌの動物説話（二）（其一、鳥類説話）」『郷土研究』1(12): 745-750.
- 1914d 「アイヌの鳥類説話（四）」『郷土研究』2(4): 230-234.
- 吉田巖（著）、帯広市教育委員会社会教育係（編）
- 1957 『愛郷譚叢 古老談話記録（帯広社会教育叢書 No.3 アイヌ古事風土記資料）』帯広市教育委員会、帯広。
- 吉田巖（著）、小林正雄（編）
- 1965 『アイヌ童話（帯広社会教育叢書 No.10）』帯広市教育委員会、帯広。

付録

表には「アイヌ童話集」（松村 1924 年版および松村、西岡 1929 年版）に掲載されている物語の原典が何であるか、『通観』の何頁に「アイヌ童話集」が掲載されているかを示した。「アイヌ童話集」収録のほとんどの物語が『通観』に掲載されていることを確認した。『通観』に掲載が確認できなかった物語には、丸括弧で括って、本来掲載されているはずの頁数を記しておいた。パチエラや鳥居龍蔵の著作には日本語訳が存在するので、原典の掲載頁の後に、[] で括って日本語訳での頁数を書き記した。吉田巖の著作に掲載されている民話は、可能な限り初出の出典を記した。初出が特定できなかった場合には『アイヌ古事風土記』や『アイヌ童話』に掲載されているものを参照した（『アイヌ童話』は、読み物として文章が整えられているほか、語り手、採録年月日などの情報が省かれている）。

なお、「アイヌ童話集」第 40 話は、『伝承と民俗』からの再話だと思われ、松村による註には「吉田巖氏曰く」とあるが、その註のもとになっている吉田（1914d: 230）は、Batchelor (1901: 220-222) の日本語訳であるパチエラ（1901: 54-56）をそのまま転載したものであり、吉田巖が述べたものではない。

略称

『アイヌ童話』：吉田巖著、小林正雄編（1965）／『アイヌ民話』：Chamberlain (1888)／『古事風土記』：吉田著、帯広市教育委員会社会教育係編（1957）／『伝承と民俗』：Batchelor (1901) [パチエラ 1995]／『千島』：Torii (1919) [鳥居 1976]

表 1 「アイヌ童話集」の原典

| 番号 | 題名 | 松村 (1924) | 松村、西岡 (1929) | 『通観』 | 原典 |
|----|--------------|--------------|-----------------|-------|-----------------------------|
| 1 | 世界の初 | 805 | 87 | 411 | 『伝承と民俗』 36, 38-39 [52, 54]頁 |
| 2 | 悪魔の初 | 806 | 88 | 398 | 『伝承と民俗』41-42 [56-57]頁(?) |
| 3 | 人間の初 (其の一) | 807 | 89 | 263 | 『伝承と民俗』 5 [26]頁 |
| 4 | 人間の初 (其の二) | 807 | 89 | 975 | 『伝承と民俗』 5-6 [27-28]頁 |
| 5 | 月男 | 809 | 91 | 228 | 『伝承と民俗』 67-68 [75-76]頁 |
| 6 | 六星と三星 | 810 | 92 | 392 | 吉田 (1914a) 38-39 頁 |
| 7 | オキクルミ神の天降り | 812 | 94 | 294 | 金田一 (1914a) 34-36, 37-38 頁 |
| 8 | 大飢饉 | 815 | 98 | 5 | 金田一 (1914a) 39-40 頁 |
| 9 | オキクルミの怒 | 817 | 100 | 305 | 金田一 (1914b) 92-93 頁 |
| 10 | サマイウンクルの大力 | 819 | 102 | 734 | 金田一 (1914b) 96 頁 |
| 11 | 豊年と凶年 | 823 | 106 | (46) | 吉田 (1914d) 233 頁 |
| 12 | 幻の女 | 824 | 107 | 536 | 『伝承と民俗』 77-78 [82-83]頁 |
| 13 | 不思議な老人 | 825 | 108 | 291 | 『伝承と民俗』 258-259 [226]頁 |
| 14 | 勇士オタスツウングル親子 | 827 | 110 | 223 | 『古事風土記』 100 頁 |
| 15 | 酋長と海主 | 828 | 111 | 421 | 吉田 (1914c) 747 頁 |
| 16 | フーヅルの話 (その一) | 829 | 112 | 895 | 『千島』 258-259 [476-477] 頁 |
| 17 | フーヅルの話 (その二) | 831 | 114 | 90 | 『千島』 259-260 [477] 頁 |
| 18 | 一眼の怪物 | 832 | 115 | 1008 | 『伝承と民俗』 73-74 [79-81]頁 |
| 19 | 杭の謎 | 833 | 116 | (880) | 『古事風土記』 112 頁 |
| 20 | 上の者と下の者(その一) | 836 | 119 | 48 | 吉田 (1914c) 746 頁 |

| | | | | | |
|----|--------------|-----|-----|-------|---------------------------|
| 21 | 上の者と下の者(その二) | 837 | 122 | 1100 | 『アイノ民話』第28話 |
| 22 | 上の者と下の者(その三) | 840 | 124 | 1099 | 『アイノ民話』第29話 |
| 23 | 上の者と下の者(その四) | 842 | 126 | 1095 | 『アイノ民話』第30話 |
| 24 | 上の者と下の者(その五) | 844 | 128 | 1104 | 『アイノ民話』第32話 |
| 25 | アイヌ浦島 | 845 | 129 | 841 | 『アイノ民話』第34話 |
| 26 | 福壽草の話 | 847 | 131 | 1031 | 『伝承と民俗』260-262 [227-228]頁 |
| 27 | 狐の神の手柄 | 849 | 133 | 1062 | 『アイノ民話』第16話 |
| 28 | 狐を馬鹿にした男 | 850 | 134 | 1107 | 『アイノ民話』第9話 |
| 29 | 子供と熊の神 | 853 | 137 | 833 | 『アイノ民話』第10話 |
| 30 | 宝物取返し | 854 | 138 | 401 | 『アイノ民話』第12話 |
| 31 | お嫁さん捜し | 855 | 139 | 110 | 『アイノ民話』第17話 |
| 32 | 鼠小僧 | 858 | 143 | 475 | 『アイノ民話』第23話 |
| 33 | 斧の祟 | 861 | 146 | 37 | 『アイノ民話』第24話 |
| 34 | 雲から堕ちた魔法使 | 862 | 147 | 272 | 『アイノ民話』第25話 |
| 35 | 蛇になった男 | 864 | 149 | 749 | 『アイノ民話』第35話 |
| 36 | 冥府に行った男 | 867 | 152 | 342 | 『アイノ民話』第36話 |
| 37 | 財産争い | 868 | 153 | 342 | 『伝承と民俗』572-574 [467-468]頁 |
| 38 | 夢の幸 | 872 | 157 | 920 | 『アイノ民話』第38話 |
| 39 | 烏糞物語 | 875 | 160 | 790 | 『アイノ民話』第42話 |
| 40 | 鶴の衣 | 881 | 166 | 724 | 『伝承と民俗』220-222 [199-200]頁 |
| 41 | 金線魚の話 | 882 | 167 | (894) | 吉田 (1914c) 745 頁 |
| 42 | 男の子と鬼 | 884 | 169 | 54 | 『古事風土記』115 頁 |
| 43 | アイヌ桃太郎 | 886 | 172 | 750 | 吉田 (1913a) 346-348 頁 |
| 44 | 郭公になった子供の話 | 889 | 175 | 960 | 『アイヌ童話』15 頁 |
| 45 | 雲雀の借金 | 890 | 176 | 1080 | 不明 |
| 46 | 鷺と鳶 | 891 | 177 | 1087 | 吉田 (1914c) 748 頁 |
| 47 | 梟の失敗 | 894 | 180 | 1042 | 『古事風土記』98 頁 |
| 48 | 烏の手柄 | 895 | 181 | 233 | 吉田 (1914b) 676 頁 |
| 49 | 裁縫師の木菟 | 896 | 182 | 1040 | 吉田 (1913b) 112-113 頁 |
| 50 | 梟の死真似 | 897 | 183 | 1081 | 『伝承と民俗』423-424 [350]頁 |
| 51 | 懸巢のお使 | 898 | 184 | 407 | 『伝承と民俗』425-427 [351-352]頁 |
| 52 | 椋鳥の話 | 900 | 186 | 985 | 『伝承と民俗』441-442 [365]頁 |
| 53 | 鼠と梟 | 901 | 187 | 1080 | 『アイノ民話』第1話 |
| 54 | 蚕と虱 | 902 | 188 | 1008 | 『アイノ民話』第2話 |
| 55 | 雲雀のお使 | 903 | 189 | 970 | 『伝承と民俗』263-264 [229-230]頁 |
| 56 | 鶏が飛べぬわけ | 905 | 191 | 970 | 『アイノ民話』第4話 |
| 57 | 雪の子兔 | 906 | 192 | 403 | 『アイノ民話』第5話 |
| 58 | 狐と土龍の神 | 906 | 192 | 1061 | 『アイノ民話』第11話 |
| 59 | 狐の仮病 | 908 | 194 | 1063 | 『アイノ民話』第13話 |

| | | | | | |
|----|--------|-----|-----|------|---------------------------|
| 60 | 蛇と蛙 | 909 | 195 | 193 | 『伝承と民俗』360-361 [300]頁 |
| 61 | 蚊母鳥の話 | 911 | 198 | 960 | 『伝承と民俗』185-187 [173-174]頁 |
| 62 | 狐の尻尾 | 913 | 200 | 1097 | 『伝承と民俗』257-258 [225-226]頁 |
| 63 | 悪魔と土龍 | 914 | 201 | 1007 | 『伝承と民俗』501-503 [414]頁 |
| 64 | 鼠と猫 | 915 | 202 | 730 | 『伝承と民俗』505-507 [416-417]頁 |
| 65 | 川獺と狐 | 917 | 204 | 1033 | 『伝承と民俗』510-511 [420]頁 |
| 66 | 川獺と鯨 | 918 | 205 | 973 | 『伝承と民俗』513 [422]頁 |
| 67 | 緑鳩の話 | 919 | 206 | 1009 | 『伝承と民俗』444 [367]頁 |
| 68 | 蝦夷雷鳥の話 | 920 | 207 | 131 | 『伝承と民俗』447 [369]頁 |
| 69 | 白嘴鳥の話 | 920 | 207 | 24 | 『伝承と民俗』448-449 [370-371]頁 |
| 70 | 白鳥女 | 921 | 208 | 223 | 『伝承と民俗』450-451 [372]頁 |
| 71 | 蛙の話 | 922 | 209 | 989 | 『伝承と民俗』26-27 [44]頁 |
| 72 | 雀の入墨 | 923 | 210 | 1015 | 『伝承と民俗』29-30 [47]頁 |
| 73 | 鳥の悪戯 | 924 | 211 | 965 | 吉田 (1914c) 745 頁 |

(さかぐち・りょう／千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程、
日本学術振興会特別研究員)